

# 西リハの リハビリ看護

## 看護師の関わり

回復期リハ病棟には、脳卒中や骨折後のリハビリを行うために、多くの患者さんが入院されています。高齢化に伴い、さまざまな基礎疾患や合併症のある患者さんも多くいらっしゃいます。看護師は、患者さんがベストな状態でリハビリを行えるよう、健康管理や環境調整を行い、気持ちをポジティブに持って行けるよう関わって、日々のリハビリテーションをサポートしています。

### 認知症患者さんへの関わり

## 気持ちよくリハビリに取り組める環境づくり

病棟には3~4割程度、認知症または認知機能に何らかの障害がある患者さんがいらっしゃいます。認知症そのものを治すというよりも、入院の本来の目的であるリハビリが軌道にのり、認知症または認知機能の障害に伴う症状が軽減できるように関わるのが、回復期における認知症看護の役割だと考えています。

例えば、認知症の症状の1つとして物忘れがあります。物忘れそのものをなくすことは難しいですが、物忘れが原因となって現れる不安やイライラといった周辺の症状を調整することは可能です。どういうタイミングで症状が出るのか、気持ちを切り替えられる方法はないか、関わり方次第で落ち着いていただくことはできないかななど、密な観察をして、穏やかに過ごせる時間を増やしていきます。患者さんにとって穏やかな時間が増えると、気持ちよくリハビリに取り組んでくださり、治療も順調に進み、ご自宅に復帰できる可能性も広がります。



看護介護部 副部長  
本館1階病棟 師長  
認知症看護認定看護師

坂野 ゆかり



大切なことは、患者さんを尊厳のある1人の人(person)として見ることです。大切に思われていると感じてもらえるように、尊厳を守る声掛けを意識し、日常の中でも患者さんが自分で何かを選択する機会を作るようになります。障害の認識がない方には、骨折した足の写真を見せて思い出してもらったり、なぜ病院に来たかというところから話して、「やってみませんか?」と選択肢を提示するようにしたりします。日常会話から入って、「今日は4月の〇日でしたっけ? だいぶ春らしくなってきましたね」のように、さりげなく見当識を刺激して季節を感じてもらったりということもあります。これらはすべての患者さんのケアに通じることなのですが、認知症の方に対してはより丁寧な声掛けが必要になると思っています。

### 摂食嚥下障害患者さんへの関わり

## 食事場面の安全を確保する取り組み

当院は、病棟に言語聴覚士・歯科衛生士・管理栄養士が配置され、充実した体制で摂食嚥下リハビリに取り組んでいます。私は摂食・嚥下障害認定看護師の立場からカンファレンスに参加し、多職種と協働して取り組んでいます。認定資格を取得する中で脳神経の知識を学ぶ機会が多くあり、療法士さんとより専門的な視点で話せるようになりました。「訓練を進めるためには病棟ではこういうケアをしたらいいね」など、職種間の架け橋になってより効果的なリハビリにつなげていけたらと思います。

最近のトピックとしては、「ミールラウンド」という活動を始めました。例えば、骨折などで入院された患者さんが、加齢のため飲み込みの機能も低下しているというケースは多々あります。しかし、摂食嚥下障害で入院しているわけではないので、本人にも家族にも危機感がなく、治療も行われません。そういう方の食事場面の安全を守るために、多職種でチームを組んで、それぞれの視点から食事場面の観察を行います。職員の勉強にもなりますし、患者さんの安全なリハビリを確保することにも貢献していると思います。



ミールラウンドの様子

### 脳卒中患者さんへの関わり

## プラス思考で良い方へ進めるように

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師として心掛けていることは、まず自分自身がプラス思考で、できるだけ楽しい方向に持て行けるように関わることです。脳卒中の後、約30%の患者さんに気分が落ち込むなどの症状がみられると言われています。「がんばれ、がんばれ」だけじゃなくて、褒めたり認めたりして、「あなたはこれだけできていますよ」「ここまでできているから、あともうちょっと、〇〇ができるようにしていきましょう」という声掛けをします。目の前の患者さんを見て、この方にとって楽しいことは何だろうと考えたり、ご家族の背景を聞いて、そこでどう過ごされるかを想像したりします。また、何事もその患者さんごとの考え方がありますから、無理強いはしないように。「リハビリがしんどい」と言われる患者さんには、「今日は少し軽めにしてもらえるかお願いしてみましょうか」と声をかけたり、再発防止のために生活習慣の改善が必要な患者さんには、「お菓子とかをあまり食べすぎないように、食べたい気持ちも分かるけど、ほどほどにしてくださいね」と言ってみたりします。でも、人によってはしっかりと促して引っ張ってあげた方が良い場合もあります。そこは、患者さん1人1人の人となりをよく見極めて、折り合いをつけながら、良い方へ持て行くようにしています。



本館2階病棟看護師  
脳卒中リハビリテーション  
看護認定看護師

渡邊 賢一

